令和８年度
一般選抜（前期日程）
文化学科
［言語文化系／地域文化創造系］
小論文
問題・出題の意図・採点評価基準

令和８年２月25日

高知県立大学

Ⅰ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（配点　100 点）

チンパンジーとの共通祖先から別れ、“人類”がアフリカで誕生してから約700万年ほど、さらに私たちと同種のホモ・サピエンスの登場からは 20 万年から 30 万年ほどとされています。農業が始まってからまだ１万年ほどなので、人類の年表を１年にすると、ホモ・サピエンスの登場は 12 月も半ばから後半、農業の始まりは 12 月 31 日です。人類は、そのほとんどを農業以前の暮らしで過ごしてきました。

農業以前のホモ・サピエンスの暮らしは、150 名程度の比較的少数の集団の中で、狩猟や採集によって食料を得ていたと考えられています。ホモ・サピエンスは、走るのも遅ければ強い牙もありません。現代であってもアフリカのサバンナにたったひとり取り残されれば、あっという間に死んでしまうでしょう。人類学者のブラウンは、ヒトはその生活の大部分を集団ですごす生き物であるとして、「単独では生活しないこと」を、ヒトという生き物によくみられる特性の 1 つとしてあげています。集団をつくることは、生き延びるための重要な戦略でした。

そんな集団をつくり維持するために必要な能力の１つが、他者への「共感」です。他者の感じていることを感じとる共感の力なくしては、集団を作り維持していくことは難しかったでしょう。

一方、他者の痛みに共感ばかりでも問題です。集団のルールを破り自分だけズルをしようとする者を、フリーライダーとよびました。「罰」とは、誰かに“痛み”を与える行為です。ひとたびそんなフリーライダーが現れてしまったとき、他者の痛みをわがものとしてしまう共感しかもたなければ、その者たちを罰することは難しくなります。しかし罰がなければ、フリーライダーたちはやりたい放題です。遠からず、集団そのものが滅んでしまうでしょう。集団でやっていくためには他者への共感が必要であるにもかかわらず、一方で、共感ばかりではフリーライダーを罰せられないという大きなジレンマに直面するのです。

ここで、「見えざる手」の登場です。共感により集団生活を維持しながらも、身勝手なフリーライダーへの共感などは論外とし、それどころかそうした「裏切り者」たちの苦しみを喜びや快感として、“喜んで”罰を与えられるようになりました。しかも直接の利害関係のない第三者の立場の者までもが、同じように罰に喜びや快感を得るのです。他者の苦しみをわが痛みとしているはずのヒトが、「見えざる手」により、フリーライダーたちに罰を与えられるようになったのです。

アダム・スミスの「見えざる手」とは、各個人は自らの利益だけを考えて行動しているにもかかわらず、あたかも「見えざる手」に導かれたかのように、社会全体にとってよいことが達成されているといったときに使われる言葉です。ばらばらな個々人のふるまいを、うまくまとめあげるその力を指しています。必ずしも“集団のために”フリーライダーを罰するわけではなくとも、裏切り者の苦しみを自らの“喜び”として罰する行動が、結局は集団の

ためになっているという意味において、見えざる手の働きと共通するものがあることをモッテルリーニは指摘しました。すべてが、いわば進化の中で培った脳の生き残りの戦略だというのです。

多くの社会に共通してみられる特性を、先に紹介した人類学者のブラウンは、「普遍特性」とよんでいます。悪いことをした者への「罰」は、こうした普遍特性の１つにあげられるほどに、実験室を超えてさまざまな現実の世界でみられることも知られています。たとえば世界中の伝統的な狩猟採集民族を調査した人類学者のボームは、集団の重大な規範から逸脱した者には、「きっぱりと、ときに絶対的な線がひかれ」、この線を超える者は、「自分の遺伝子の未来を犠牲にする」かもしれないほどの厳しい罰を覚悟する必要があることを指摘しています。ノーベル経済賞受賞者の政治学者オストロムは、世界各地の共有資源の多くが、その共同体のメンバーによる自発的な罰によって維持されてきたことを指摘しています。

しかしすぐにおわかりとは思いますが、この「見えざる手」は諸刃（もろは）の剣をもっています。「悪い奴！」とみなされた者に対しては共感の仕組みが働かず、その苦しみが“快感”となる世界で、一体何が起こるのでしょうか……。とある学生さんは、「世界中で戦争が終わらないわけが、よくわかりました……」、そんなコメントを残しています。

出典：小林佳世子『最後通牒ゲームの謎　進化心理学からみた行動ゲーム理論入門』日本評論社、2021 年

（出題の都合上、出典の文章を一部省略・改変した。）

注：

ドナルド・ブラウン　　アメリカの人類学者

アダム・スミス　　イギリスの経済学者・道徳学者

マッテオ・モッテルリーニ　　イタリアの科学史・科学哲学者

クリストファー・ボーム　　アメリカの人類学者

エリノア・オストロム　　アメリカの政治学者

問１　本文中での「集団」と「罰」との関係性について、400 字以内の日本語で説明しなさい。

（配点　50 点）

問２　下線部で「「見えざる手」は諸刃（もろは）の剣」であると述べられていますが、あなたは「見えざる手」の二面性について、どのように考えますか。本文の内容を踏まえて、具体例をあげながら 400 字以内の日本語で述べなさい。

（配点　50 点）

＜出題の意図＞

文化を学ぶうえでは、人文科学・社会科学に通ずる問題を理解し、主体的に問題にかかわっていくことが重要な意味をもっている。筆者の説明する「集団」と「罰」について理解し（問１）、「「見えざる手」は諸刃（もろは）の剣」であるという筆者の主張に対して自らの考えを論理的に記述する（問２）ことを求める。

＜採点評価基準＞

問１　次の点を見て評価する。

（１）「集団」と「罰」についての、筆者の説明を理解できているか（読解力）。

（２）筆者の主張をわかりやすくまとめられているか（文章表現力）。

問２　次の点を見て評価する。

（１）内容理解に基づいて、具体例とともに自説を展開しているか（知識・理解力）。

（２）適切な言葉を用いて論理的に表現できているか（文章表現力、論理的思考力）。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（配点　100 点）

In 1876 Isawa Shūji (1851-1917), who was then studying at the Bridgewater Normal School in Massachusetts, visited the Centennial Exhibition at Philadelphia's Fairmount Park. He sought out the display of one Alexander Graham Bell (1847-1922). Isawa knew about Bell because in Massachusetts he had encountered a special alphabet, "Visible Speech," that Bell's father, Melvin, had devised to help mute persons learn how to speak. Isawa was curious about this alphabet because he was still struggling with English and believed that it might also help him with his English pronunciation.

Although Bell's new device for transmitting the human voice across a distance had become the talk of the exhibition, Isawa was more interested in Visible Speech, which included a series of diagrams of the mouth showing how to produce sound physically with one's lips, tongue, and teeth. Isawa's interest in pronunciation was especially strong because musical education, including singing, was an important part of the curriculum at Bridgewater, and Isawa was having trouble both with Western musical scales and the pronunciation of the English words he had to master in order to excel in these classes.

When he returned to Boston from the Centennial Exhibition, Isawa visited Alexander Graham Bell and asked him for lessons in proper pronunciation. At that time Bell was a professor of vocal physiology and elocution in Boston University's School of Oratory. He took Isawa on as a student and assistant, even though the sensation caused by his new device had made him a very busy man.

One day that same year—it is not recorded exactly when—Isawa invited his friends and fellow exchange students Kaneko Kentarō (1853-1942) and Komura Jutarō (1855-1911), both of whom were studying law at Harvard University, to visit Bell's laboratory to see Bell's invention. Many people, not having seen the invention or perhaps suspecting trickery, were still skeptical that the voice could really be transmitted from one place to another. Isawa had yet to try the device for himself, and Kaneko found the entire idea preposterous.

After a thorough presentation of the principles of telephony, Bell invited two of the young Japanese students to try the device for themselves. Bell handed Kaneko the receiver and then spoke into the other end: "Hello! Hello!"

Kaneko was astounded. Bell gave the handset to Isawa, who then proceeded to speak to Kaneko in English. Shocked that it was working, Isawa began to mumble to himself in Japanese.

"Isawa!" Kaneko cried. "This machine is incredible! It works in Japanese too!"

Japanese thus became the second language, after English, to be transmitted across a telephone line.

出典：Kerim Yasar, *Electrified Voices: How the Telephone, Phonograph, and Radio Shaped Modern Japan, 1868-1945*, Columbia University Press, 2018
（出題の都合上、出典の文章を一部省略・改変した。）

注：
the Centennial Exhibition at Philadelphia's Fairmount Park　フィラデルフィア・フェアマウント・パークで開催されたアメリカ独立 100 周年記念博覧会
Alexander Graham Bell　スコットランド生まれのアメリカの発明家
transmit　～を送信する、送る
talk　うわさ、世評
diagram　図解、図表
curriculum　教育課程、カリキュラム
musical scale　音階
excel　ひいでている、傑出する
physiology　生理学
elocution　発声法
oratory　弁論術、雄弁術
take ～ on　（生徒など）をとる、～を採用する
trickery　ぺてん、ごまかし
skeptical　懐疑的な、疑い深い
have yet to　まだ～していない
preposterous　不合理な、ばかげた
telephony　電話通信
the other end　相手の側
astound　～をびっくり仰天させる
handset　送受話器
mumble　ぶつぶつ言う、つぶやく

問１　Isawa Shūji がアメリカ独立 100 周年記念博覧会を訪れた理由について、第１段落、第２段落の記述に即して、200 字以内の日本語で説明しなさい。

（配点　50 点）

問２　Isawa Shūji と友人たちが Alexander Graham Bell の電話を試用して驚いたのはなぜか。彼らの体験が歴史的な意味をもつ理由をふまえて、あなたの考えを 150 語程度の英語で述べなさい。

（配点　50 点）

＜出題の意図＞

問１　Isawa Shūji がアメリカ独立 100 周年記念博覧会を訪れた理由が書かれている課題文前半（第１段落、第２段落）を正確に読み取ることができているかどうかを見る。

問２　課題文後半（第３段落以降）の内容から、Isawa Shūji たちが驚いた理由に関する記述を的確に読み取ったうえで、その歴史的な意味について、文法的に正しく、論理的かつ分かりやすい英文で表現することができているかどうかを見る。

＜採点評価基準＞

問１　次の点を見て評価する。

（１）課題文の内容を正確に理解することができているか（読解力）。

（２）Isawa Shūji が博覧会を訪れた理由を、適切な文章で表現することができているか（文章表現力）。

問２　次の点を見て評価する。

（１）課題文の理解に基づいて、Isawa Shūji たちが Bell の電話を試用して驚いた理由を理解し、その体験の歴史的な意味を推測することができているか（読解力、知識・理解力）。

（２）自分の考えを、論理的かつ的確に表現することができているか（論理的思考力、文章表現力）。